

じんこう 沈香のかおる香炉

香炉(標本番号H197771、高さ/8.3cm 幅/14cm 奥行11cm) マレーシア

信田 敏宏(のぶたとしひろ)

本館研究戦略センター

このきらびやかな香炉の収集地であるマレー半島西海岸のマラカには、プラナカンとよばれる人びとが住んでいる。プラナカンとは、一五〜一六世紀ごろにマラカ王国にやってきた中国系移民の子孫である。移住当初、プラナカンの祖先たちの多くは現地のマレー人女性と結婚した。彼らは、食べ物や衣装などにマレー文化を取り入れながらも、独自の文化を保持してきた。

さて、この香炉であるが、これは大伯公たいはつこうを祭る家庭用祭壇のセットの一部である。おそらく、プラナカンの人びとも日常的に使用しているものであろう。大伯公とは、福德正神の俗称で、中国人の開拓者として守護神化したものである。一般には土地公とよばれている。マレー人の土地神と融合したものも見られる。マレー文化を取り入れた



プラナカンの人びとにとっても、身近な神であるにちがいない。

ところで、香炉で焚かれる香の原料には沈香が含まれている。沈香とは、ジンチョウゲ科のアクイラリア(Aquilaria)属の樹木から採取される芳香性の樹脂のことである。原産地は南中国から東南アジア、そしてインドにまで広がっている。質の良いものは高額で売買されているが、今日、枯渇が危ぶまれ、貴重な森林資源となっている。

わたしは、マレー半島の先住民オラン・アスリの村で調査をおこなっているのだが、森で偶然見つけた沈香を華人仲買人に売却して大儲けした話を村びとから聞いたことがある。この沈香は、マラカに運ばれて売られたのかもしれない。